

「紅樓夢」の女性たち*

駒林麻理子

1. はじめに

18世紀の中国には、白話小説の傑作が二つ生まれた。それまでに中国の白話小説は数百年の歴史を持ったが、18世紀の中葉、時期をほとんど同じくして、異なったテーマを扱った二つの作品が生まれた。一つは呉敬梓の「儒林外史」であり、一つは曹雪芹の「紅樓夢」である。それ以前にもすぐれた小説はいくつかあった。たとえば、「水滸伝」、「三国志演義」、「西遊記」、「金瓶梅」などである。「三国志演義」は歴史にもとづいて書かれたものであり、国の興亡をめぐるその間のかけひきを描いたものであり、「水滸伝」も農民蜂起の歴史にもとづいて書かれたものであり、いわば男たちの友情と抵抗を描いたものである。「西遊記」も事実にもとづいているが、さらにその上に幻想による世界を築きあげたものだ。「西遊記」の主人公は、人間であるよりはエテ公である孫悟空に移ってしまったような感じであるが、とにかく、この三つの小説は男たちの活躍を主題にしたものだ。それに対し、「金瓶梅」は、時代の社会風俗などを背景に男女の愛欲の世界を描いたものである。主人公は男であるが、彼をめぐる六人（以上）の女性が主人公のまわりに存在し、前の三つの作品とは、まったくちがった人間像を創造した。

ところで、「金瓶梅」の後を受けて、女性の世界をテーマの一角にしてでき上ったのが「紅樓夢」である。もちろん、「紅樓夢」は女性を描くためにのみ生まれたのではない。封建貴族買家の大屋敷「寧国邸」と「榮国邸」を舞台に、榮華から崩壊へ向っていく封建貴族の家庭、その中に生活するだらしない人間、美しい女性たち、権力をたてに不正をはたらきながら世を渡っていく官吏、優雅な花見の宴や誕生の宴、その中でくりひろげられる詩作、現実の世界の外にある非現実的な世界、世代の確執、家庭の中の不和など、多くの物語が一つの話の中に交錯している。この作品は世に出てから約二百年、多くのファンを生み、「紅学」という学派をうちたてたほどだ。

さて「紅樓夢」を読んで気がつくのだが、他の多くの白話小説は、すじを中心に人間を思いだすことが多いのに対し、この小説は、人間を中心に話のすじを思い出すことが多いことである。しかも物語の展開をみると、男性の登場人物も女性にとらず数多いし、話の展開には大きな役割をはたしているのだが、どういうわけか読んで印象に残るのは女性たちである。さりげなく第一回でいっているように、作者が女性のためにかなり力をこめて筆を運んだであろうことが感じられる。旧紅学派の中にもこの小説を政治小説とみだてて、男性は満州族を代表しており、女性は漢民族を代表しており、清朝の満州族支配に対抗し、明朝の滅亡をいたみ漢民族の再興を希望する作品であるという見解がある¹⁾。そういう考え方は、今やはやらないが、その見解の正しさはともかくとして、「紅樓夢」の中で女性の占める地位がかなり重く、よき者の代表として描かれている点に着眼したのであろう。また、この作品に批を書き続けた脂硯齋なる人物

* 1978年4月24日受理

を女性とみたてた説があり²⁾、この作品に女性がこれだけ影をおとしているという点にも考慮をおいた上での意見であろう。

ただし、「紅樓夢」の女性は、女性に対する問題意識によって書かれているのではなく、女性へのほのかな同情が作品の中に流れているにすぎないのだが、いずれにしても女性に対する評価は低くない。「紅樓夢」の女性を見てみると、その評価の一部が「鏡花縁」に発展していったものと考えられる。ここで、「紅樓夢」の女性像とはどういうものなのか検討してみたい。

残念なことに、作者曹雪芹は、80回までを完成させて貧困のうちに世を去った。書きつがれた後40回は、別の作者のものであり、必ずしも曹雪芹の考えた通りではなく、後40回のイメージで、人物の性格がちがって来た面もあると思う³⁾。が、後に「鏡花縁」との関連を考える機会をいつか持ちたいと思うので、後40回も無視できないものがあると思われるので、作者が一人でないことを承知した上で後40回も考慮にいった。テキストは、人民文学出版社の1974年版による「紅樓夢」を使用した。

2. 賈家の女性と賈宝玉

さる都に居をかまえる賈家は、祖先の功によって財と名誉を築きあげた貴族の家で、召使だけでも数百人いる大家族である。住人は四代に亘り、老婦人から、赤ん坊まで多人数の人がいる。女性を中心にみると次のようである。

第一代 史太君。この世代で残っているのは、今や男性では家塾の責任者賈代儒一人で、彼は屋敷の外に住み、勢力があるわけではないから、この屋敷の長老はここのご隠居さんである。古い世代だけあって、祖先のすばらしかった人々に未練があり、女性ではあるが象徴的な意味でこの家のピラミッドの最高点に君臨する。

第二代 邢夫人、王夫人、薛未亡人、趙第二夫人ほか。中年層。実質的にこの屋敷をきりもりしている夫を持った世代である。女性としてよりは、別の立場から見られている。王夫人は、融通のきかない道学の見本のような夫と、父親にきらわれる息子の間をかけまわる母親として、一方では嫁として登場。薛未亡人は、どうしようもない不良息子のためにふりまわされる母親として出てくる。邢夫人は、夫と母親（自分には姑）があまりしっくりいかないのと、自分が息子夫婦とそりが合わないため、孤立した陰険な人物として、趙氏は、賈環をたてにとって少しでも自分の地位を高めていこうと隙をねらっている腹黒い母親として表現されている。この世代は、生活の中で権力の座に近い所にいるので、発想や行動が現実的で夢がない。後40回にさしかかって、主人公の結婚をめぐる王熙鳳と共に権力を発揮するのもこの世代である。

第三代 林黛玉、薛宝釵から始って、賈元春、賈迎春、賈探春、賈惜春、王熙鳳、李纨、史湘雲、尤氏、妙玉、さらに途中からこの大家族に合流する薛宝琴などの人々がいる。平兒、襲人、晴雯など、各部屋づきの女性もこの世代に入ると考えると、数十人の数にのぼる。

作者は、この世代に多くの感情をこめて書いている。この世代が中心になっているのは、主人公賈宝玉の年令にみあった眼の高さにレンズを合わせてあるわけで、この時代としては特殊な生き方をした主人公の眼を通して、封建時代に苦しい生活をしたであろう女性のほんのわずかの青春時代というものを写し出している。後で述べるが、賈宝玉が本当の年令に比して、精神的成長がおくれているということはこの作品にとって大切なことであって、その男の子によって存在の一部をささえられている女性たちの像がここにある。

第四代 秦可卿、巧姐など。大家族なので同じ四代といっても年令の差があり、既婚の夫人

から赤子までを含む⁴⁴⁾。

その他 必ずしも年令ははっきりしないが、多分第二代に属す、使用人としての中年の女性たちがいる。

なお、この屋敷を外の世界と結びつける者としては、第二代の賈敬が道教の修養にあけてくれて外部に住んでいるのと、賈政が官吏として政治勢力の世界に顔をつないでいるの⁴⁵⁾とがあり、そして権力の象徴としてしかも決して幸せな日々を過しているわけではない賈元春が、貴妃として皇宮の奥深く暮らしている。

上の如くおおざっぱに賈家の女性陣を整理した上で、話は男である賈宝玉の上に及ぶ。賈宝玉は男であるが、彼の存在を無視しては話が進展しないのだ。彼の女性びいきは、第二回からすでに始まる。

那周歲時、政老爺試他將來的志向、便將世上所有的東西、擺了無數叫他抓、誰知他一概不取、伸手只把些脂粉釵環抓來玩弄；那政老爺便不喜歡、說將來不過酒色之徒、因此不甚愛惜。獨那太君還是命根子一般。——說來又奇：如今長了十來歲、雖然淘氣異常、但聰明乖覺、百個不及他一個；說起孩子話來也奇：他說：‘女兒是水做的骨肉、男子是泥做的骨肉、我見了女兒便清爽、見了男子便覺濁臭逼人！’你道好笑不好笑？將來色鬼無疑了！

賈宝玉が女性の身につけるものを手に取って喜んだというのは、理屈っぽくいえば日頃見なれたものを手にとったといえようが⁴⁶⁾、象徴的に彼の姿勢を表わしたと考える方がよい。「女の子を見ると、せいせいした気分になるが、男を見るとくさくて胸がむかつく」という言葉は、子供にしてこのようなセリフというわけで、彼は大変な色気違いの候補生となってしまった。父親である賈政は、ごらんの通りかたぶつのサンプルみたいな人間であるが、息子（それも赤ん坊）と女性という結びつけ方をした場合、淫とか猥褻という角度からしか物ごとを見ることができないのである。少なくとも賈政は、ふしだらな行為者としてはこの小説の中に登場してはいないけれど、学問をおさめた身としておごそかに登場するにしては、その精神的発想の何と貧相なことだろう。裏を返せば、女性に対する見方がそういう角度からしかなされないことは、賈珍などのやさしと一脈通じるものがあるのではないだろうか。賈宝玉は父親が大きらいで、親子の精神的な確執が問題になるくらいであるが、父親の女性観とはまったくちがった考えを持った宝玉は、自分でもそれがどういう考えなのかははっきりしないのだ。それがはっきりした形で説明されるのは、警幻仙姑の口からで、「淫雖一理、意則有別。如世之好淫者、不過悅容貌、喜歌舞、調笑無厭、雲雨無時、恨不能天下之美女供我片時之趣興：此皆皮膚濫淫之蠢物耳。如爾則天分中生成一段痴情、吾輩推之爲‘意淫’。……」と説明された。ここで賈宝玉が話の内容を理解したかどうかはともかくとして、読者には、宝玉の女性好みが多なる淫という発想から起こっているのではないこと、したがって世の一般の例とは同じでないことが示された。それと同じようなことは、第二回の賈家を紹介するくだりでも、賈雨村の口を借りてもっと理屈っぽい説明をしている。もって生まれた痴情は、精神的なもののみに終始するわけでないが、精神のささえをぬきにしては考えられない行為である。

とにかく、あからさまに男をけなし、女をほめる言葉を口にするのは、この時代としては大変勇気のいることであったろう。どうしてもしゃべる人間は、ある程度の子供でなくてはならない。しかも、彼の精神年令が幼なければ、発言の内容はかなりの清潔感と正義感にうらうちされて、ひきしまった意味で受けとることができる。しかし、同じ内容の言葉でも、ある年令をこえた、

精神発達の完全な大人の口から出たのでは、どうも言葉のうらに何やら別の含みがあるようで、まわりにいる者にも、読者にも素直に受けとることができない。しかも、たかだか子供がいて、いるのだからと思えば、男尊女卑の信念にも、必要以上の抵抗感を与えないですむ。しかも、賈宝玉が、女の子たちとまったく自由に行ったりきたりし、ともに生活しているのは、家の最高権力者の史太君が、孫を可愛がるあまり起こったことである。ある程度成長してからは、彼は自分で女の子と離れるのをいやがるが、子供時代の責任は自分にあったわけではないのである。

賈宝玉の発想や、女性に対する発言は、決して底意のあるものではない。彼は一貫して屋敷の女性たちのファンである。ただ彼の女性に対する行為は、世間一般の常識からいったら、奇妙な癖があるのは事実だ。

人の紅を吸うのを好むとか、美しい人を傍におくのを好むとか、一見ただけでは誤解をまねきやすい。が、原則として彼が、人との交りに精神的な交りを基盤とした交流を重んじているのは確かである。精神的でない面も時にはあり、自分の部屋にいる襲人とも関係を持つが、それでもふざけ半分の行動ではない。賈赦から鴛鴦へ、賈珍から尤三姐へ、賈璉から鮑二のかみさんへ、賈蓉から尤二姐姉妹へという心の動きと行為を考えてみたら、賈宝玉の態度ははるかに真面目である。晴雯を見舞った席で、彼女の従兄の女房にからまれて、「さっと顔を赤らめて、恥しいやら恐いやら」というのは、どうみても第二代の男たちの感覚ではなく、賈宝玉の純情さによるものだ。襲人との関係や、紅を吸うことが、そのままずると彼の精神的かまえをくずしていかないのである⁹⁾。

因他自幼姐妹叢中長大，親姊妹有元春探春，叔伯的有迎春惜春，親戚中又有湘雲、黛玉、寶釵等人，他便料定天地間靈淑之氣，只鍾于女子，男兒們不過是些渣滓濁沫而已。

賈宝玉の男を無視する習慣はこうやって身についていくのだが、彼の女性への評価というのは、若い女性に限られるようだ。

怨不得寶玉說：‘女孩兒未出嫁是顆無價寶珠，出了嫁不知怎麼就變出許多不好的毛病兒來；再老了，更不是珠子，竟是魚眼睛了！分明一個人，怎麼變出三樣來。’

賈宝玉の発言は何やら滑稽ではあるが、女性の変化をかなりの確に表わしているのであって、彼はその理由を別の時に次のようにいっている。

寶玉又恐他們去告舌，恨的只瞪着他們。看走遠了，方指着恨道：“奇怪，奇怪！怎麼這些人，只一嫁了漢子，染了男人的氣味，就這樣混賬起來，比男人更可殺了！”守園門的婆子聽了，也不禁好笑起來，因問道：“這樣說，凡女兒個個是好的了，女人個個是壞的了？”寶玉發恨道：“不錯，不錯！”

宝玉は外見の美にもかなりこだわるのであるが、精神的なものにもこだわっているのもあって、美しい姿には、それらしい中味が宿るべきだと思うまではよいのだが、宿っていると決めこむのが単純なのである。女性が結婚した後、男の臭いにそまってだめになると、彼は、その原因を外に求めているが、実際どうなのであろう。人間はある一定の年令まで成長してその境をこえていくと、自分の内部的な自覚と、社会的な圧力があいまって、いやおうなしに大人の世界に足を踏

み入れる。その変化は、女性の方が大きいのではないだろうか。若い女性だって不自由であるにはちがいないが、せめてその不自由さからのがれられる世界を大観園の中に作りたい、その精神的保護者になりたい、と宝玉は考えているのだ。実際には、そんな世界は長く存在することはできないので、女性たちは、年とともに大人の世界にひきもどされる。

「紅樓夢」の作者は、買家の人間を描く時に、第二代の中年層の女性と、第三代の女性の間大きな線をひいているのである。その意味で、王熙鳳は排行からいえば第三代だが内容的には、第二代の中に入るのである（王熙鳳のことは後に別に述べる）。第二代は、権力のある場所に近くいるので、利害関係もはげしく、行動が打算的である。第三代の女性は、「紅樓夢」の中では、まだ自分の世界を少しは持てるのであって、食事の例をひとつあげても、第三代の家族はお嬢様として食事に出席できるが、第二代の女性たちは、嫁の立場になって食事につきそうことになる。大人に成長していく過程において、現実の波が押し寄せてくるのは、女の子に対して苛酷である。しかも自分を可愛がってくれると思っている人々が「終身の大事」にあたっては、まったくちがった態度で臨んで来るのに対して、若い世代は抵抗のしようもなく踏みにじられていく。

曹雪芹が81回より後に抱いていた物語と、続篇の話の展開は必ずしも同じではなく、続篇に対する不満を持つ人は多いようだが、成長して現実的な世界にもどっていく人間像を描いたという意味では、続作は悪くないと私は思っている。

なお、第二代の女性と第三代の女性を区別しているようなことは、「紅樓夢」に登場する女性と男性の間にもいえることであって、男性は、ごますり、賭博、飲酒というように非常に現実的な生活面で描かれ、若い女性とは大変対照的である。しかも、女性の美しい面は、多く賈宝玉の眼を通して描かれ、醜い屋敷内のできごとは、直接読者にむかって展開されることが多い。

また、賈宝玉が若い女性のみを対象としてひいきしたことの別の原因として、宝玉の年令からくるレンズの位置がかかわっている。自分と同じか、それより下の者であれば、彼は保護者とか仲間ということで、彼女たちと接触することができる。年が上になってくると、年の老幼のやがましいこともあって、保護者というのは具合悪いし、仲間でもない。さらに、ある程度年令をこした女性は、ただ女性であるよりは、母であったり、おばであったり乳母であったり、ばあやであったり、本人の意思とかかわりなく別の肩書きが生じてしまうのである。宝玉の保護ということも非常に大きいこととはいえない。しかし、盗品にともなわってわかった犯人をかばうために、自分がふざけて盗んでみたといったり、王熙鳳になぐられて逃げてきた平児を着飾ってやったり、彼としては、まずはがんばっているつもりである。平児を着飾るにしても、多分に宝玉の自己満足的な面があるが、ぬれぎぬを着せられて追い出されるか、泣き寝入りすることを考えれば、これだって相当な同情である。まして、着飾っただけで話は終るのであり、その後からけしからぬ行動に及ぶわけでもない。

ところで、賈宝玉は、男の友人に対しても美しいという観点から選ぶ癖があるようだ。だが、やはり見せかけのみでなく、心のつながりというのを重んじているように感じる。宝玉はここでも、すぐれた容姿にすぐれた心が存在しているかのように思っているらしい。

3. 才子と佳人

曹雪芹は、世をさるまでずっと「紅樓夢」の書き直しに努力したといわれるが、とにかくありきたりの才子佳人をいやがった。

據我看來，第一件，無朝代年紀可考，第二件，并無大賢大忠、理朝廷、治風俗的善政，其中只不過幾個異樣女子，或情或痴，或小才微善，我縱然抄去，也算不得一種奇書。

況且那野史中，或訕謗君相，或貶人妻女，奸淫凶惡，不可勝數；更有一種風月筆墨，其淫穢污臭，最易壞人子弟。至于才子佳人等書，則又開口‘文君’，滿篇‘子建’，千部一腔，千人一面，且終不能不涉淫濫。——在作者不過要寫出自己的兩首情詩艷賦來，故假捏出男女二人名姓，又必旁添一小人撥亂其間，如戲中的小丑一般。更可厭者，‘之乎者也’，非理即文，大不近情，自相矛盾：……

上述の第一回の序文のくだりでも，従来の小説に出てくるような才子佳人を批判しているし，賈母の口を借りてもいっている。

這些書就是一套子，左不過是些佳人才子，最沒趣兒。把人家女兒說的這麼壞，還說是‘佳人’！編的連影兒也沒有了。開口都是鄉紳門第，父親不是尚書，就是宰相。一個小姐，必是愛如珍寶。這小姐必是通文知禮，無所不曉，竟是‘絕代佳人’，——只見了一個清俊男人，不管是親是友，想起他的‘終身大事’來，父母也忘了，書也忘了，鬼不成鬼，賊不成賊，那一點兒像個佳人？……比如一個男人家，滿腹的文章，去做賊，難道那王法看他是一個才子，就不入賊情一案了不成？……既說是世宦書香大家子的小姐，又知禮讀書，連夫人都知書識禮的，就是告老還家，自然奶媽子丫頭伏侍小姐的人也不少，怎麼這些書上，凡有這樣的事，就只小姐和緊跟的一個丫頭知道？……

われわれも才子佳人という言葉を用いることがあるが，やはりひとつの人間のパターンを思い浮べていることが多い。それは物語のあらすじをも必然的に決めてしまうことが多いが，上の曹雪芹の述べたことをもからみ合わせて考えてみるとおよそ次のようになろう。

才子は，まず美男子である。

年若く，科挙の試験を受けるべく，目下猛勉強の真最中であるか，晴れて合格したかである。将来に洋々たる前途がある。

金持ちの息子のこともあるし，貧乏のどん底の場合もあるが，ゆきずりに出あった女性に一目ぼれして魂をうばわれてしまう。

佳人は，まず美人である。

年若く，宰相の一人娘であるように，金持ちの娘であるか，金持ちでなければ，花柳界に身をおくが，大変な義侠心の持主である。

女性ではあるが，学問を身につけているか，学問はなくても，受験勉強する才子をけなげにも励し続ける心を持っている。

ゆきずりにあった人に一目ぼれして心もうつろになってしまう。

話の進展はといえば，二人をへだてるものは，受験やその結果による距離的な移動，親の反対，第三者の登場による誤解であるが，最後には，一目ぼれした二人は晴れていっしょになって，めでたしめでたしとなる。

作者が才子佳人のきまりきったパターンに反対したというのは，次の意味からであろう。

才子は才子，佳人は佳人で，皆同じような人間でありすぎて，差がなさすぎる。

きめられたルートの上を歩きすぎる。

ゆきずりの一目ぼれによる恋愛では現実性が感じられない。

めでたし、めでたしで終る物語は、読者の夢をかなえる役をはたすことはできても、現実にくわれないし、必ずしも作者の心を満足することができるとは限るまい。

ところで、作者は、たまたま作中の女性を表現するにあたって、男性に近い面をひきあいに出してその人を形容している場合がいくつかあるので、それを一部ひきあいに出して、作者が一般男性にいただいていたイメージを見てみよう。

林黛玉——今如海年已五十、只有一個三歳之子、又于去歳亡了、雖有幾房姬妾、奈命中無子、亦無可如何之事。只嫡妻賈氏生得一女、乳名黛玉、年方五歳、夫妻愛之如掌上明珠；見他生得聰明俊秀、也欲使他識幾個字、不過假充養子、聊解膝下荒涼之嘆。→息子のかわりに、聰明な女の子に学問をしこんだ。→知識の面での同等。

探春——我但凡是個男人、可以出得去、我早走了、立出一番事業來、那時自有一番道理；偏我是女孩兒家、一句多話也沒我亂說的。→仕事を処理する上での不自由さと、大きな志をとげることのできない嘆き。→行動範囲の広さと、じゃま物の少ないことをうらやむ。

史湘雲——扮作小子樣兒、更好看了。…… 你要是個男人、出去打一個抱不平兒；你又充甚麼判軻、聶政？→いでたちからして男性スタイル好み、あけっぴろげな性格で、弱き者の味方をする人が好き。→正義。

王熙鳳——少說着只怕有一萬心眼子、再要賭口齒、十個會說的男人也說不過他呢！……你是個脂粉隊裏的英雄、連那些束帶頂冠的男子也不能過你、你如何連兩句俗語也不曉得？→口も八丁手能力も、賈家の悪どもにまさるとも劣らないことをもいつている。→すご腕。

作者の男性一般に描いているイメージはこれである程度わかるけれども、賈家の人々と比較してみると、何とかけはなれていることだろう。悪事をしかける能力に関する評価以外、およそ該当するものがない。

賈宝玉は主人公でたぐいまれな美をそなえた貴公子である。しかも、学識、能力ともにあるのだが、科挙の試験を受けるための決まり切った勉強には大反対である。「四書五経」を中心とした学問が面白くないからだ。詩文をつくるような、人間の感情を流露することができる物には豊かな反応を示すのだが、科挙の試験の結果手に入ることになっている名誉や地位にも冷淡で、悪口さえいつている。この一点においても、主人公が第三代に属する若い人間であることが必要なわけで、自分の欲のなさで悟り切っているから、地位が必要ないのではなくて、かなり理屈をこねてそのような地位についている人を悪くいつている。大人の口から出たものとしては、いささか負け惜しみ半分にひびくが、馬鹿な子供がしゃべっているのであるから、問題にもならずに見すごされてしまう。しかし、賈宝玉が決りきった無味乾燥な学問をいやがる気持は、80回までこの小説に一貫して流れている。それ以下は続作家の判断にもとづくが、後40回にいたって、賈宝玉が受験勉強をするようになるが、それが、前半の彼の思想性とそぐわないようであるが⁷⁾、父親のあせりと、子供時代からやや成長して、現実の世界に首をつっこんだのであれば、そう不自然でもあるまい。いずれにしても、こういう一風変わった男に対応する佳人であるから、これも伝統的な佳人ではない。

第三代の女性たちを見てみよう。「紅樓夢」は、「水滸伝」の発想に影響を受けている。だが、「水滸伝」の百八人の男たちが、理由は別であれひとさわぎやらかして、梁山泊に勢ぞろいして来る過程が、一つの見どころであるのと反対に、女性が集ってくる過程が興味の対象なのではな

くて、集った後のいっしょの生活と、別れていく点が話題なのである。集り方は、血縁関係であるとか、雇用関係が基本であるから、いたって平凡自然である。集合後の生活も屋敷の中であるから、普通の生活に限られてしまい、退屈といえば退屈な日常性を中心としたものである。ただ見なれない貴族の生活に驚くといえば驚くのであって、そういう意味では、知らない世界が展開するといつてよいのであるが。

その中で、生活している女の子たちは、昔の佳人と比べると、二重の意味で自己主張を持っている。

一つは、美しさが人形のようにのっぺりと立っているものではなく、自分自分の性格をきちんと持っているという意味で、人間としての存在感を感じさせるということ。

さらにもう一つは、自分の考えを持っている人間が多いということ。自分の考えとは、主張というほどに強い内容のものではないが、ある行為に、心理的な裏づけを持ちながら行動に移る。

また、二重の意味で欠陥を持っている。

一つは、夢みたいな美しい性格の持主ではなくて、性格的に何か欠けた点を持っていること。時には、作者は読者をがっかりさせるほどに、ずばりと批判がましい言葉を他の登場人物の口からいわせるのである。

もう一つは、自分の性格とは無関係に、何か満たされない点を持っているのであって、宰相の一人娘、玉のうてな生活というわけにはいかないのである。

どちらの面からとるにしても、彼女たちは人間らしいのである。

林黛玉 神経質で孤独を好み、誰とでもつきあえる人間ではない。

薛宝釵 一見円満に見えるような性格をもっている。封建的な社会では一番世渡りがしやすい。

賈迎春 あまりにもおとなしくて自分の面倒も見きれないくらい、「棒きれさん」と呼ばれるくらい静かに生活しているが、あまりにもおとなしいところが、かえって登場人物としての自己主張に見える。

賈探春 頭のきれ味は抜群だが、変に冷淡な面がある。

賈惜春 まだ子供であるが、思いこんだら頑固で一徹。

史湘雲 豪快なタイプで、ものにこだわらない。

妙玉 孤独で傲慢。

王熙鳳 豪快なじゃじゃ馬タイプ。特に悪事にかけての腕は大変なものだ。

襲人 主人にはよく仕えて、よく気がつく。封建社会では、一番世渡りのしやすいタイプである⁸⁾。

晴雯 その表現の仕方は異なるが、主人思いの点では、襲人に劣らない。むしろ個性の強さが宝玉の好みに合う。

李纨 仏様のようにいわれるが、若い女性たちの面倒はよく見て、自分の分に応じて生きていく。

いずれにしても、百人をこす女性を全部ここに書きあげるわけにはいかないが、比較的登場する場面の多い人だけを並べてみただけでも、十人十色である。

従来の才子佳人の物語のように、波瀾を経て結びついて終了という短い小説ではないので、人間の基本的性格の上に、いろいろ小さな事件がつながって、それを通しての行動、発言、対応処理の仕方によって、彼女たちの人間性がわかると同時に、作者の手による第三者の批評の会話を通して、多くの女性たちを整然と書きわけている。

それにしても、権力の座にすわらない者にとっては、自分の主張と感情を持っていることが、

何と生活しにくいことなのだろう。林黛玉にしても、晴雯にしても、口がするどく率先して自分の感情を表わすという点で、反感を招き、自分の生きる道がなくなってしまうのではないか（黛玉の場合は続作者による）。史太君は、気のきくてきばきした探春を、必要以上におとなしい迎春よりはるかに気に入っている。同じ意味で、子供としては、林黛玉をも気に入っているのだが。大人になるにしたがって、林黛玉も、晴雯も、生きにくい。

しかし、一方では、迎春のように声ひとつたてずに生きていくような人間でも、待っているのは夫の虐待であり、尤二姐のように男のいいなりに身をつくし、香菱のように男の付属品のように真心をつくしても、待っているものは、正妻からの虐待であり、夫からの冷遇と乱暴である。

生活環境のよしあしでも、それぞれ彼女たちは解決のつかない問題をかかえている。

林黛玉 両親を幼い時に失って身寄りが無い上に、病身である。

薛宝釵 ぐうたら兄貴の度をこしたひどさに悩まされ続け、結局この物語の始めから終りまで悩まされ通し。

賈迎春 育ての母親である邢夫人からは可愛がられず、兄夫妻からもほうりっぱなしにされている。

賈探春 ややもすれば、妾腹の子であることを、他人にとりざたされる。できの悪い母親と、弟がいつも目ざわりなことを起こす。

賈惜春 嫂の尤氏とうまくいかない。

史湘雲 両親がいないため、叔父にひきとられて育てられ、自分の家にもどった時には使用人と同じようにこきつかわれているらしい。

妙玉 出家している身にもかかわらず、煩惱につきまといわれる。主として賈宝玉への愛情である。

王熙鳳 自分の勢力からいってこわいものなしのはずだが、夫がしょっちゅう女性問題をひき起こす。

襲人 ご主人さまである賈宝玉が、自分の望んでいるように、科挙のための勉強に精を出してくれない。

晴雯 美しさが災となって、あらぬ疑いをうけることになる。その原因は、王夫人の母親として、屋敷の権威者としてのエゴイズムによってひき起されたものだ。

これまた千差万別の悩みをかかえていて、結構づくめの人間など一人もいない。

次に作者が力をそそいで書いたであろう第三代の恋愛問題を見てみよう。才子佳人としてのスタイルにはまった恋愛をつきくずすのは、いうまでもなく賈宝玉と林黛玉である。

読者には二人の特別の因縁というものが、最初から種あかしになっているのだが、本人たちはそれを知る由もない。恋愛のきっかけが、一目ぼれという単純な動機ではなく⁹⁾、幼くして知りあい、共に遊ぶうちに共通の人生観を基盤として、相互理解の上になりたった感情の実りである。友情から恋愛へと発展していく過程が、二人の心理を通してこまやかに描き出されている。賈宝玉の眼と、林黛玉の眼を通して、あくまで自分たちの責任において相手を選んでいる。その中で、お互いに心をひかれつついながら、相手の心を確かめては、誤解をして失望し、失望し、くり返しては悩み続け、また相手の心を確かめて心を強くする。才子佳人のストレートな人間に比べると、実にわりきれが悪く、そこがまた読む者にはまだるっこしいが、よくわかる。

二人の関係からみたら、その間をかき乱しているのは第三者の薛宝釵であるが、それがじゃましているようなしていないような状態で、かえって神経質な林黛玉を悩ませる。もっぱら林黛玉の疑心暗鬼的な推測によって生じた第三者が、二人の間をかき乱しているのだ。第三者が大げさ

に立ちまわって二人の間をかき乱したのから、むしろ心理的なかく乱へとなっている。賈宝玉の愛情も、こと黛玉に向っては、非常に精神的なものに限られている。

作者は、賈赦、賈珍、賈璉、賈蓉、賈瑞らと比較して、賈宝玉の恋愛をはるかに清潔なものとして描き出している。二人の行動は、人目にあまることはなく、心の内部にしまわれていることでつつまじやかであるが、世の中に対して後めたいところはなく、自然な描き方をされ、彼らの恋愛が非常に肯定的態度で扱われているのがわかる。

残念ながら、作者は80回までを執筆して世を去った。続作者の作品が、作者の意図と同じではないとして非難されることがあるが、結局美しい恋愛がつまぬかれることなどないのだという現実的な世界に話が発展していったのであれば、それなりの成功をしたといえるし、この悲劇が多くの人々の心をうったのは事実である。

一般論からいって、後40回に出てくる人々は、伝統的な才子佳人型ののっぺりした人物像をこくしている。人間は才子佳人型に近づいたのに、物語は才子佳人的な定石をやぶって悲劇に発展しているという、矛盾を見せている。恋愛問題については、続作では、賈宝玉も封建社会の犠牲者なのだ。だが、玉を失って精神錯乱状態にある間に、ことが発展してしまうというのも、考えてみれば、賈宝玉をどう処理したらよいかまよったあげくの続作者のずるさともとれる。どっちみち犠牲の大きいのは女性だという感がする。

このひと組の若者を別にして、愛情の問題を考えた場合も、女性側の方がはるかにしっかりした主張をもっているように思われる。しかも、屋敷のお嬢様ではなく、日頃人の下にあって働いている女性の中に、そういった主張がはっきりしているのも興味深い。たとえば鴛鴦、司棋、尤三姐などである¹⁰⁾。

鴛鴦に対する賈赦の手の伸ばし方は、まるっきり一方的で、まるで品物のやりとりのようだ。

因此常冷眼選了半年，這些女孩子裏頭，就只你是個尖兒：模樣兒，行事做人，溫柔可靠，一概是齊全的。意思要和老太太討了你去，收在屋裏。你比不得外頭新買了來的，這一進去了，就開了臉，就封你做姨娘，又體面，又尊貴。……

自分がのしあがっていく条件さえよければ相手が感謝すると思っている本妻と、ことわられたら面目まるつぶれと思っている夫に対し、妹を利用して出世をたくらむ兄たちだが、当の本人は、財産にも地位にも目をくらすことなく、自分が納得しない形で身が売られていくのをあくまで拒む。

甚麼‘好話’？又是甚麼‘喜事’？怪道成日家羨慕人家的丫頭做了小老婆，一家子都仗着他橫行霸道的，一家子都成了小老婆了！看的眼熱了，也把我送在火坑裏去。……

主人の勢力範囲からのがれることのできない彼女は、結局史太君が存在している間しか、その毒牙をさけることができないのだ。

話かわって司棋に及べば、もっとしっかりした女だ。司棋は、この小説の中で数回にわたってしか登場することがないのだが、感情のはげしい点では晴雯とよく似ていて、主人である賈迎春とは正反対である。女性の側も納得した上で、公式な関係でなく男とあいびきをする女性であるが、自分の納得の上で行動したことであるので、自分の行動に対して責任を持っている。自分たちの行動が他人に見つけられたことに対しては、恥ずかしく思うが、事の発覚をさとって、いち

はやく行方をくらました相手の若者とはちがう。

忽有個婆子來悄悄告訴道：“你表兄竟逃走了，三四天沒上家。如今打發人四處找他呢”。司棋聽了，又急又氣又傷心，因想道：“縱然鬧出來，也該死在一處。眞眞男人沒情意，先就走了！”

結局事件は、あれこれからんで、大觀園の住人の持物の捜査にまで発展し、司棋は目下恋愛中の証拠品をおさえられた。彼女は何もいわなかったが、まったく悪びれなかった。後に司棋の自殺事件にいたるが（続作者）、結局相手の態度があいまいに見えたからであって、責任感にしろ自主性にしろ、彼女の方がよほど強い。

尤三姐の場合は、もう少し大人の世界の話になって、自分にも原因があるが、やはり、尤三姐の本当の心に対して、ふんぎりの悪い男の態度によって起こされた悲劇だ。

結局、宝玉の場合まで含めるが、かなりの真心を男性が持っていないながら、なかなかふんぎりのある態度がとれないことが、女性の不幸を招く結果となっている。

賈迎春のように人のいいなりになって生きてても、出口があるわけではなく、自分の意志を貫ぬこうとしても、出口がない若い女性たちである。

さて、知識ということにかけて述べてみると、大觀園の女性の中には、字の読める人も読めない人もいる。文字についての意見は、後に薛宝釵のことについて述べる時に言及するが、一般的に、作者は知識がある方がよいとも、ない方がよいとも、はっきり一方に味方した言い方をしてはいない。しかし、詩を読む女性たちの生き生きした表情や場景を考え、書物を手にとる場面を思い浮べれば、字を知る者の世界は、知らない者の世界より、いちだんと広がりがあり、豊かな自己の表現をする機会となっている。賈宝玉の詩より、林黛玉の詩の方が上手であることも、非常にさりげない感じで読みとられ、それによって宝玉の能力が低められることはまったくないが、詩の力によって林黛玉の価値が高まっているのは見逃せない。

詩論、画論から、酒令、なぞなぞまで、知識を披露する場面は、小説の内容ととけあって、自然に物語の中に組みこまれており、読者がそれによってまどいを感じることはない。むしろ、科挙の試験を中心とした形にはまった学問でなく、詩によって自分の個性を表現する機会を持つことのできる女性たちに、彼女たちのほこりを持たせているようだ。詩を読む様子ひとつにしても、その性格と適当に対応しており、大きな演出効果をあげている。

ここに登場している才子と佳人は、どうもできあがりの物さしをあててはかるには、寸法の目もりが異っているようである。その人間の中をのぞいてみれば、いかにも人間らしい実感をもった人間の姿がある。伝統的な才子佳人の持ちあわせていた美しさを、警幻仙姑の世界にあずけた女性たちの世界である。

作者は、はっきりした言葉を通して、女性をほめたたえているわけではないが、主人公賈宝玉の眼を通して、封建社会に生きる若い女性に同情を示している。

続作者が、出家を希望する賈惜春の言葉としていわせた「雖不能成佛作祖，修修來世或者轉個男身，自己也就好了。不像如今脫生了個女人胎子，甚麼委屈煩難都說不出來。」というのが、女性の口から出た数少い抵抗の言葉である。

4. 林黛玉と薛宝釵と王熙鳳

これまで部分的には女性像について語ってきたが、ここで特色ある人物について述べておこう。

林黛玉と薛宝釵は、賈宝玉にとっては同じ年代のいここにあたるが、まったく異ったタイプの人間である。美しいということと、詩の才能がある（学問教養があることになる）という二点を除いては、およそ共通点がない。美の種類も、一方は柳腰的なやせ型美人であるし、一方はふくよかな丸ぼちゃ型の美人である。

気がまわりすぎ、皮肉をいう、やきもちをやく、心が狭い、お高くとまっている、偏屈、林黛玉の性格を表現している言葉の部分拾っていくと、ちょっと意外な感にうたれてしまう。ただ読んでみると、とても陰險な人間を思わせる文字が多く並んでいる。それなのに、「紅樓夢」を読み終って、林黛玉が非常に大切な人間に思えてくるのはどういうことなのだろう。たとえば、言葉としては上のような表現になると大変悪い印象を与えるのだが、同じ内容のことで行動や心理描写を通して描かれると、まったくちがった印象をつくり出すという点にも理由はあるのではなかろうか。気がまわりすぎというのは、神経がこまかくて、他人の行動によく気がつくということであるし、皮肉というのは、心の感情を率直に表現する性格と通じることがある。やきもちにいたっては、あきらかに、彼女の誠心誠意が賈宝玉に集中しているのに、相手が理解しているのかどうかよくわからないという理由でおこった、あせりのやきもちである。王熙鳳が夫の浮気に対して、眼をつりあげて怒りの情を発するのが、むしろ、権威ある自分のプライドを傷つけたという、男に対する憎しみと、他の女に対する恨みであるのとはちがう。正しく純情なる乙女の可愛らしい真心の表われである。そして大切なことは、林黛玉に対する賈宝玉の愛情を通して、そのイメージが非常に高くなっていることであろう。屋敷の中に初めて越して来た時、彼女は祖母が感涙にむせぶほどの感動を与えた。その後もずっと可愛がられていた。しかし、大人の眼から見た場合、林黛玉の性格は、個性の強さからいって、封建的な大家庭に向かないことは確かである。だが、彼女は、受験勉強をいやがって、おきまりの男の街道を歩もうとしない宝玉をかなりきちんと理解している。宝玉の側は、それは自分だけに対する大切な理解である。神経の細さもほれた眼から見れば、美点の一つとなってしまうだろう。相互理解の上になった二人の組み合わせを大切にしていこうとする作者の気持も働いて、読み続けていく程に、林黛玉のファンにとって、実に切ない気持にさせられてしまうのだ。最後に、彼女が息をひきとるくだりは、続作者の責任になるけれども、自分の感情を忠実に貫ぬいたという点で、感動させられるのである。

反対に、薛宝釵に対して使われている言葉を拾ってみると次のとおりだ。おおらかでさばけている、分をわきまえている、万事ひかえめに人に接する、よくねれた心の広い方、公平で私心がない、などと理想の中の理想の女性であるかの如き言葉がめじろおしである。才能も、林黛玉に並ぶことのできる数少ない女性の一人である。一見はるかに林黛玉をしのぐかのように見えるが、それがそうでもない。何やら封建社会にふさわしすぎる見識をそなえすぎている、しかもただ人形のようにのっぺりしていないところが、どうもピンとこないのである。ただし、買家のような封建貴族の家庭では、彼女の如き良妻賢母型の人間が歓迎されるのはいうまでもない。こういう人間はぜひとも必要である。王夫人が、金釧児の自殺の件で悩んでいる時にいう宝釵の言葉がある。

據我看來，他并不是賭氣投井，多半他下去住着，或是在井傍邊兒玩，失了脚掉下去的。他

在上頭拘束慣了、這一出去、自然要到各處去玩玩逛逛兒、豈有這樣大氣的理？縱然有這樣大氣、也不過是個糊塗人、也不爲可惜。

これは王夫人の気持を慰めるためにいわれたものだが、自分の発言が、上の人にとりいる細かい計算の上ではなく、自然に出て来るところが、何ともやりきれないのである。王熙鳳の行動や発言が、史太君や王夫人を自分の味方にひきつけるための細かい計算にもとづいているのとは大ちがいののだが、そのためにますますやり切れない気持にさせられてしまうのである。女子の教育について、彼女はこう考えている。

咱們女孩兒家不認字的倒好：男人們讀書不明理、尙且不如不讀書的好、何況你我？連做詩寫字等事、這也不是你我分內之事。——究竟也不是男人分內之事。男人們讀書明理、輔國治民、這纔是好。……至于你我、只該做些針綫紡績的事纔是；……

お説教としてでなく、自然な言葉として出てくるところが、なお窮屈だ。この点が、宝玉にしみてみれば、やはり物足りないわけで、自分の気ままに暮したい心を理解してもらえないのが、面白くないのであろう。続作者の手による宝玉との結婚も、涙は流しても賛成もせず反対もせず興入れしていく。その後幸せな日々を送ったとはとうてい思えないが、女のががみのようになって、妻の座と嫁の座にどっかり座っている¹¹⁾。もっぱら夫の気持をひきたてて受験勉強に精を出すよう励して、自分も苦労しているが、どうしても林黛玉に感じられたような親愛の情がわからないのである。

王熙鳳は、数多い女性の中でも、成功して描かれている一人である。もしこの人が存在しなかったならば「紅樓夢」そのものの中心的柱が存在しなくなって、この物語はなくなってしまおう¹²⁾、というのは本当である。

家系の上の分類からすると、あきらかにこの人は第三代に属するのだが、実際は第二代の範囲に入る人間として描かれている。同時に、物語全体を通して美しく描かれている女性の中では特異な存在として、悪事には何でも一役かう点は、物語の男性の範囲に近い人物である。そういう立場の複雑さが、王熙鳳の人物像に反映されている。また、王熙鳳は賈璉に対しては妻として、史太君、邢夫人、王夫人に対しては嫁として、巧姐に対しては母親として、平児に対しては姉御として、賈家全体の人にとっては、台所の権力をがっちり握る若奥さまとして、尤二姐には嫉妬として、林黛玉への紹介による「潑辣子」がもっとも端的であり、同時に、黛玉の登場を迎えて登場する、彼女の舞台裏のはなやいだ笑い声も、日頃の王熙鳳のイメージをよく伝えている。

王熙鳳の勢力は、まず自分が四大家の一つである王家の出身であることに始って、賈家の屋敷内で権力を持っている史太君や、実際の実力者の王夫人にうまくとりいつていることによって生じたものである。王熙鳳の史太君にごまをする行為は、細かい計算づくである。史太君の方は、それを見ぬいた上で、孫の嫁を利用しながら自分の威厳を保っている面もあるから、持ちつ持たれつ¹³⁾の関係がある。これだけの権力を持っているのに、字が読めないというのは不思議な気がするが、林黛玉のように思考する喜びを知る人間としてではなく、家内の実務をとりさばき、武力を動員しても、自分の威令がびしりと行なわれることに生きがいを感じる人間だ。当然口は八丁で、その一点でも、束になってかかる男どもを圧倒している。若い女性が、詩を読むことによって自己の表現をするのに対して、そのかわりに笑い話をして座を保つ能力がある。薛宝釵が良妻賢母

のような人間として、人を説得して自分の座に座るのに比べると、こちらは威力恐喝型で、すごみがある。王熙鳳が「寧国邸」の葬儀をひき受けるにあたって、自分の出番に小踊りしながらも、表面はやむを得ずひき受けたかのようにとりつくろう。その処理を見ると、まるで法家の政治規則を家政の中に持ちこんできたかのように厳格である。職責をはっきりすること、賞罰を厳密に査定して申しわたしをしている。屋敷内の給金をとり扱っていながら、それを元金にして高利貸しをして荒かせぎをし、人の結婚話をぶっこわし、間でこわし料をとりたて、純情な若い人を自殺に追いこむ。

作者は、あからさまに王熙鳳を非難するような言葉はっていないが、後に薛蟠の妻となった夏金桂を、王熙鳳と比較し、夏金桂に対する宝玉の意見を述べさせている。「美しさは誰にも劣らないのに、何であんな心を持っているのだろう！」と。ただ、王熙鳳の悪業にしても、読者は全部知りぬいでいるのだが、屋敷の中の人には知らないことも多い。高利貸しの点一つにしても、史太君から賈政まで、まして宝玉たちは何も知らないのだ。尤二姐の事件にしても、王熙鳳の心は、読者には画面に映し出された映像のようによく見えているのが、小説の中にいる人々には、表面しか見えず、親切心なのか、いやがらせなのか、皮肉なのかわからない。

強がりの王熙鳳にとっては、泣きどころといえば、亭主の素行がおさまらいなことである。彼女の強さをもってしても、なかなか賈璉の身をつなぎとめておくことができない。あれだけ手の早い賈璉が、一方では女房の尻にしかれっぱなしというのは滑稽である。しかし、気の強い彼女が、夫の気をひきつけようとして手段を弄するさまは、滑稽を通りこして、犠牲になる人が哀れである。

後40回の、賈家の財産没収後の彼女の気の弱さは、前80回の彼女の生き方にそぐわないと思う¹³⁾。いずれにしても、彼女は美によって国や城を傾けた傾城ではなくて、悪知恵によって家を傾け、身を亡ぼした女である。時々、王熙鳳は「史記」に出てくる呂後の面影を連想させる。

5. む す び

宝玉の精神的保護を受けて存在していた大観園の女性たちも、世をさる者はさり、ほとんどいなくなってしまった。続作では、宝玉も家の犠牲者として描かれ、宝玉と黛玉の愛情を育てていく過程から一転して、立ちふさがり、大家族の前に、二人の愛がひきさかれ、家も崩壊して物語は終わった。

作者は、一見、誰がよいのか悪いのか、誰に味方しているのかしていないのか、はっきりわからないような書き方をしている。主人公の宝玉も、馬鹿だ、変りものだ、変な奴、とかんばしくない評判ばかり並んでいると、読者は一瞬とまどってあせってしまうのだ。しかし、小説を読み終ると、作者の、この主人公に対するなみなみならぬ愛情を感じずにはいられない。同時に、この屋敷で住人としている若い女性たちも、すぐれているのかいないのか、ほめているのかけなししているのか考えこんでしまう。だが、非常にゆるやかな筆の運びをしながらも、作者は、この若い女性たちに無限の同情を示しているように見える。彼女たちは、「自分が女性に生まれて不幸だわ」などとはいいてはいない。しかも、自分も気がつかないうちに、できあがった封建社会の現実の生活の中に組みこまれ、結果から見れば、結局封建社会に一番生き残りやすいタイプの間が生き残っていく。

作者の同情は、あまり強い言葉となって小説の中に流れてはいないが、読む者にはやはりそういう意味の感銘を与えたようだ。たくさん生まれた続作は、多くは林黛玉と薛宝釵のどちらが宝

玉の心をとらえるかを中心にしたものが普通であるが、一方「鏡花縁」のような女性をテーマにした小説へも影響を与えた。

「紅樓夢」は警幻仙姑の世界とか、賈宝玉に対する甄宝玉の存在を物語におりこむことによって、非現実的な世界をも作りだしたが、買家での人々の生活は、現実的にまとめられている。

「鏡花縁」の作者は、百人の女性を主人公にしたが、まず人間の善意ということから出発して、小説を構成した。「紅樓夢」の中にある、若者たちの苦しみを倍増する家庭の桎梏というものがなくなり、家族の間の摩擦、不理解、いがみあいが姿を消した。そのかわり、登場する人間も、文武両道をおさめた才子と佳人になった。特に、少年賈宝玉の役割が、主人公の父親に担われることになったので、男女の愛を描く情の世界がまったく吹きとんで、女性はさっそうと学問にはげむ人々の一団となった。

同じように決まり切った佳人には反発しながら、「紅樓夢」は、いかにも人間らしい感情を中につめこんだ人間を作り出したが、「鏡花縁」は、美と善意を兼ねた女性が、家庭の外の社会へ一歩足を踏み出していくことに話を集中した。しかし「鏡花縁」の作者は、初めから、そんな理想的な社会が存在していないことを知っているし、女性がそんなにさっそうと生きていくことができないことをよく知っている。

さっそうとした女性が登場するのは、ずっと近代になってからなのである。

注

- 1) 「石頭記索隱」 蔡元培 1917年 商務印書館
- 2) 「紅樓夢新證」 周汝昌 1953年 棠棣出版社
- 3) たとえば、俞平伯などは、もともと後40回に否定的態度をとった。「紅樓夢研究」1952年 しかし、現在の中国では、長く120回本が読まれたという実際の状況にもとづいて、後への影響を評価して、後40回をも含めて「紅樓夢」ということが普通である。
- 4) 巧姐の年齢がはっきりしない点があるが、これについては、「紅樓夢の脇役たち」(伊藤漱平 人文研究20—10 大阪市立大学)に解説がある。いずれにしても、初めは小さな子であるにちがいない。
- 5) 「賈寶玉論」 蔣和森 人民文学 1956年6号 彼が女性のものをつかんだ事について述べているが、やはりこれは、特殊な好みの表われと考えてよいと思う。
- 6) 宝玉の意淫については、「賈寶玉を通してみた紅樓夢の思想」(村松暎 芸文研究27号 慶応大学)に述べてある。
- 7) 「《紅樓夢》の後四十回爲甚麼能存在下来?」李希凡、藍翎 文芸月報 1956年6号
- 8) 襲人は薛宝釵の「副」であるという説がある。「《紅樓夢》中 關於“十二釵”的描写」文学評論 1963年4号なおこの論文に反論したものには、周琪の論文がある。「評《紅樓夢》中關於“十二釵”的描写」周琪 文学評論 1964年4号
- 9) 二人の愛情については、「紅樓夢の構成について」(加藤知彦 中国文学報 1956年4号 京大中文研究室)や、「紅樓夢後続ノート」(塚本照和 天理大学学報96 天理大学学術研究会)などを参照。
- 10) この三人については、「《紅樓夢》中三烈女」(上)(下)(王昆侖 光明日報 1963年2月2日と同2月5日)を参照。
- 11) 薛宝釵の結婚については、「薛寶釵論」(蔣和森 人民文学, 1955年6号)参照。林、薛の比較としては、「《紅樓夢》中兩個對立的典型——林黛玉和薛寶釵」(李希凡、藍翎 新觀察 1954年23号)など参照。
- 12) 「王熙鳳論」(上)王昆侖 光明日報 1963年4月25日
- 13) 7)に同じ。

Abstract**Women in Hunglounmêng**

Mariko KOMABAYASHI

Hunglounmêng is the best colloquial novel that was written in 18 century.

More than two hundred persons come on the stage of this novel, and half of them are women. These women are classified into four, one of which is the one of young women.

Th'aohsüehch'ing (the writer of this novel) is sympathetic with these young women, because they could not enjoy happy life in the feudal times in his opinion, and described these women with charming sentences and words identifying himself with the hero of this novel.

These young women in this novel also have personalities quite different to women in old Chinese novels. They are not dolls for others, but are human living with positive mind and will.

I analyzed their characters as well as the sympathy Th'aohsüehch'ing expressed in this novel.